The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	出土竹簡の語る世界 ： 特集号「戦国楚簡と中国思想史研究」の刊行
Author(s)	湯浅, 邦弘
Citation	中国研究集刊. 2004, 36, p. 1-2
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/61130
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

中国研究集刊　騰号（総36号）平成十六年十二月　一―二頁

出土竹簡の語る世界

――特集号「戦国楚簡と中国思想史研究」の刊行――

湯浅邦弘

平成十六年（二〇〇四）三月二十六日・二十七日の両日、大阪大学を会場に、国際シンポジウム「戦国楚簡と中国思想史研究」が開催された。

日本の国立大学は、平成十六年（二〇〇四）三月をもって「国立」に終止符を打ち、四月に「独立行政法人」へと移行した。その「国立」最後の数日に、研究史を飾る意義ある国際シンポジウムが行われ、極めて熱心な討論が交わされたのは、主催者の一人として望外の喜びであった。

このシンポジウムで主な対象とされたのは、近年新たに発見され、現在公開が進められている戦国時代の竹簡資料である。かつて甲骨文字の発見が中国古代史を大きく塗り替えたように、これら大量の竹簡群は、これまでの中国思想史の常識や定説に対して、根本的な見直しを迫っている。

そうした差し迫った状況が、このシンポジウム全体に心地よい緊張感を与えていた。本号は、その緊張感を広く世界の研究者にお伝えし、中国思想史研究の発展に寄与しようとするものである。

全体は、縦組（縦書き）の部と横組（横書き）の部によって構成した。和文を主とする縦書の部では、まず、このシンポジウムを企画段階から支えていただいた台湾大学の佐藤将之氏に、このシンポジウム開催までの経緯ならびに国際交流の重要性について「覚書」を記していただいた。また、二日目の最終プログラムとして行われたパネルディスカッション「出土資料と中国学研究」の

模様を筆者の編集により採録した。

続く、論考では、上海博物館蔵戦国楚竹書（上博楚簡）、郭店楚墓竹簡（郭店楚簡）を中心とする関係論考九本を掲載した。この内、林啓屏氏の論考は、このシンポジウムでの中国語発表原稿に基づくものであるが、幸い、当日の通訳を務めた大阪大学大学院文学研究科博士後期課程の上野洋子君の翻訳原稿があったため、それを基に和文翻訳原稿として掲載するものである。

次に、横組の部では、まず、シンポジウム全体のプログラムを改めて掲載し、続いて、当日の基調講演を行われた台湾大学の陳鼓應教授、研究発表を行われた東呉大学の郭梨華教授を初めとする五名の研究者の中国語論考を掲載した。大阪大学大学院文学研究科博士後期課程の黒田秀教君の論考は、デジタル環境における出土文献の文字処理について提言を行ったもので和文原稿ではあるが、内容の特殊性に鑑み、横組の部に配置した。

以上、本号は論考十七本、附録二点という膨大な分量になった。『中国研究集刊』の創刊以来、初めてのボリュームである。これは、今、出土資料研究がいかに重要な局面を開きつつあるかを物語っているであろう。

「千字文」によって号数を表示する『中国研究集刊』は、本号が「騰」号となる。文字通り、この出土資料研究が重要な研究分野としてわきあがってくることを期待したい。

なお、このシンポジウムの概要、および上博楚簡・郭店楚簡などの基礎的情報、参考文献などについては、大阪大学中国哲学研究室ＨＰ（http://www.let.osaka-u.ac.jp/chutetsu/）内の戦国楚簡研究会ＨＰ（http://www.let.osaka-u.ac.jp/chutetsu/sokankenkyukai/index.html）でも紹介している。併せて御高覧いただければ幸いである。